論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	高　瀬　　裕　人
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

文化的実践としての読むことの教育評価に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	山　元　　隆　春
審査委員	教　授	吉　田　　裕　久
審査委員	教　授	田　中　　宏　幸
審査委員	准教授	間　瀬　　茂　夫

〔論文審査の要旨〕

本論文は、文化的実践という視座から読むことの教育評価を捉え直し、自立した読者を育成するための教育評価のあり方を考究し、学習者を自立した読者に成長させるための、読むことの教育における教育評価の理論構築を目指した。

本論文は序章・終章を含め、６章で構成されている。

序章（研究の目的と方法）では、研究の目的と方法が述べられ、先行研究をふまえた上で本論文の位置が示されている。

第１章「読むことの教育と評価の課題」では、「読解」と「読書」の関係や読むことの教育における「読者」の位置づけという観点を中心にしながら、わが国の読むことの教育の歴史的検討をおこない、その成果と課題を探った。その上で、読むことの教育評価に関して従来達成されてきたことを集約し、検討すべき課題を明確にした。

第２章「文化的実践としての読むことの教育評価の成立条件」では、現代アメリカにおける教育評価（論）の展開について、標準テストの位置や教室レベルでの教育実践の実際を中心に考察した上で、文化的実践としての読むことの教育評価に取り組む教師の価値観を、リー・ガルダ、マイケル・グレイブス、フランク・セラフィニ、ピーター・アフラーバックといったリテラシー教育や評価の研究者が教師たちとともにおこなった研究を手がかりとしながら、具体的に検討した。考察を通して、教師と学習者が各自の読書に関する価値観を互いに共有する過程を生み出す、本物の評価実践が重要であり、読むことの評価実践を、学習者を理解・探究するために学習者とともに営み、学習者自身が自らの読書行為を省察し評価していくことができる力を育む実践として組み立てていく重要性が明らかにされた。

第３章「文化的実践としての読むことの教育評価において求められる教師の専門的力量」は、前章の考察の成果をふまえ、読むことの評価対象の選択、読むことにおける評価情報の解釈、読むことの評価方法の選択・運用、という三つの角度から、教師の専門的力量を掘り下げた。アメリカ合衆国のリテラシー教育、わけても、読むことの教育評価に関する代表的な研究者である、マイケル・プレスリー、ピーター・アフラーバック、ジュディス・

ランガーらの著作を丹念に読み込み、解釈することを通して、読むことの教育評価のための教師の専門的力量を具体的に明らかにしたことは大きな成果である。とくに、プレスリーとアフラーバックの著した『読書についてのヴァーバル・プロトコル』、ランガーの『心の中を描きだす〔第２版〕』の分析によって得られた、評価対象の選択と評価情報の解釈に関する手がかりは、これからの読むことの教育評価のための重要な指針をもたらすものとなっている。またアフラーバックの CURRV モデルに関する詳細な考察は、教師が学習指導のなかで、学習目標に照らしてどのような評価方法を選択し、運用すればよいのか判断する上で参考となる指針を提供している。

第４章「文化的実践としての読むことの教育評価の実際」では、従前の各章で考察してきた文化的実践としての読むことの教育評価の具体的な姿を、アメリカ合衆国で展開されているリーディング・ワークショップの実践報告書の克明な分析・検討を通して明らかにしている。ドナ・サントマンの「能動的な想像力」を育むための読むことの学習のなかでの教育評価のあり方と、エリン・オリバー・キーンによる子どもとのカンファランス（面談）の実際について考察しながら、本論文で考察してきた、文化的実践としての読むことにおける教育評価の条件を明るみに出している。

終章（研究の総括と展望）では、本論文で見いだした成果を総括するとともに、研究の展望を述べている。

本論文の意義は、次の４点に見いだされる。

（１）読むことの教育評価を文化的実践として捉え、膨大な文献の検討をもとにして、それが成立するための基本的条件を指摘した。

（２）読むことの評価対象の選択、評価情報の解釈、評価方法の選択・運用それぞれの角度から行われた、アメリカ合衆国の読むことの教育評価に関する重要な研究を考察することを通して、文化的実践としての読むことの教育評価を担いうる、教師の専門的力量としてどのようなものが必要なのかということを明らかにした。

（３）学習者を読書へと誘い、自立した読者へと成長させていくために、教師が教育評価に関する専門的力量を身につけて、学習者に寄り添うことが、評価実践としてきわめて重要であることを明らかにした。

（４）とくに、従来十分に分析・検討がなされてきたとは言えないリーディング・ワークショップ実践の綿密な分析・検討に取り組み、そのことを通して、学習者が読書過程を通じて組み立てた理解の実際について、教師と学習者とが対話することの意味を掘り下げ、文化的実践としての読むことの教育評価のモデルを見いだした。今後のわが国における読み・書きの教育評価実践のための指針をもたらすための基礎研究として高く評価することができる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成２６年８月２５日